

平成 29 年 11 月 1 日

旅行日程は以下の通り。

15:25 見学 15:55 → 17:15 → 17:45 着 → 18:25 着
身延町歴史民俗資料館 矢原・新清水 IC JR 清水駅東口 JR 静岡駅南口
(案内: 鰐沢生涯学習課職員)



江尻の吸江山法雲寺に到着。

はじめに江尻と次郎長について触れておきます。

養父先の米屋「甲田屋」を次郎八の継いで商いに精をだしていた次郎長でしたが、強盗に遭い瀕死の重傷を負ったこと（旅の僧に25歳までの命と相が出ていると言われた）をきっかけに真面目に働くことがばからしくなり、「どおせなら太く短く生きよう」と博奕に身を投じました。

当時、江尻は東海道の宿場町で栄

え旅人相手の娯楽や飲食などが集中していたのですが、この周辺を一手に引き受けていたのが和田島一家の太左衛門であります。駆け出しの次郎長はこの親分の息のかかった所で自由気ままに遊び歩いていました。

そして太左衛門のもとにいた江尻の大熊こと熊五郎（問屋場の大熊）と次郎長はやがて兄弟の盃を交わし、熊五郎の妹の「おちよ（初代お蝶）」と一緒にになりました。

古老の話によれば和田島一家のあったこの紺屋町には次郎長の喧嘩道場があったそうで、「爺さんが子分衆に抱いてもらった」という地元の言伝えがのこっています。

和田島の太左衛門（解説：山田健司会長）

幕末の侠客として、その名を東海道に広くいきわたらせた和田島の太左衛門は、本名を上田竹次郎といった。生家は旧両河内村字和田島（清水区和田島）の地で、興津川上流のこの地は和紙の産地で栄えたところで、家は名主をつとめ久左衛門の倅であった。

太左衛門こと竹次郎には二人の兄と一人の弟がいた。四人兄弟の三男で長兄は家を継ぎ名主をつとめた。次兄は仏門に入って、中河内字木山野の宝樹寺（臨済宗妙心寺派）の住職となり「宝樹寺第三世中興の師」と言われた信庵禪師で名僧であった。弟は江尻の伝馬町に住み田中屋勇吉といった。

三男の太左衛門（竹次郎）が一家を構えていたのは、江尻紺屋町（現江尻町）であった。太左衛門生家の上田家は明治になって「昌」と苗字を改めている。名主の出身の太左衛門がどうして博徒の世界に入ってしまったのか、其の詳細



法雲寺のある江尻紺屋町

は分からない。弘化2年、津向の文吉と庵原川で対峙し次郎長が仲裁に入った。その次郎長は太左衛門の弟分といわれている。



和田島太左衛門の墓前にて

かつて遠州で二人が顔を合わせた時、次郎長は自ら太左衛門の草鞋の紐を解きその足を洗って、上座に据え厚遇したといわれている。土地の大先輩であり甲州街道から江尻宿にかけて、大きな縄張りをもっていたので、さすがの次郎長も太左衛門には頭があがらなかったらしい。

伝承によると、太左衛門は江尻宿の旅籠・四ツ目屋に婿入りして、四ツ目屋伝左衛門と襲名していたといわれている。伝左衛門は四ツ目屋の通称で、太左衛門は博徒としての名で、博徒らは当時二つの名を持ち、別名を名乗ることが多かったようだ。

四ツ目屋は江尻宿の旅籠屋で、紺屋町の山田惣左衛門が代々経営していた。旅籠には飯盛女がいて当時は遊郭同様の営業もしていた。

太左衛門は江尻紺屋町に住んでいたことは確かで、人格は侠客であっても刀は抜かず、常に正しきこと「義理整然」として義侠心があったので、次郎長はこの太左衛門の意見をよく聞いていたともいわれている。

江尻法雲寺の過去帳に「博道慈愛居士 明治元年八月五没 町内 竹次郎」とある。
(町内＝紺屋町)

俠客房五郎



また法雲寺には、太左衛門と関係の深い山田房五郎という侠客が眠っている。

俠客房五郎は弘化二年七月、江尻宿の山田惣左衛門の子として生まれた。惣左衛門は庄屋をつとめながら旅籠・四ツ目屋を営んでいた。弘化二年は丁度、次郎長が甲州の津向の文吉と駿州の和田島の太左衛門の出入りを仲裁し一躍俠名を高めた年である。

次郎長の初代の女房おちょうは、江尻の大熊の妹であった。江尻紺屋町に次郎長の喧嘩道場があつて次郎長は稽古にきていた。同じ町内に住む房五郎はこの道場に遊びに来ていて、次郎長の稽古をよく見物していて、そのうちに次郎長を慕って、ついて行ってしまったと、房五郎の姪が話してくれた。房五郎は同町内の紺

屋町に住む和田島の太左衛門の影響を受けていたのかもしれない。次郎長は房五郎のことを、大先輩である太左衛門の女房の実家の子、庄屋の倅でまだ小僧だったこともあつて、別扱いしていたようだ。房五郎は講談や浪曲の「清水一家二十八人衆」には登場しないが、

次郎長が売り出したばかりからの子分で、通称を四ツ目房五郎と云われていた。明治十七年に次郎長が「博徒一斉刈込」にて逮捕・投獄された時の房五郎の活躍の様子を、後年になって三代目女房のおちょうが語っているから、有力な子分であったことは確かである。天田愚庵執筆の『東海遊侠伝』によると、文久三年五月、黒駒の勝蔵の子分等は、勝蔵捕縛の手配をしていた遠州見附の大和田の友蔵を襲撃したが、友蔵側の反撃にあって敗退した。これを聞いた黒駒の勝蔵は八十余名の子分を天竜川の西岸に集め友蔵を襲撃しようとした。友蔵もまた東岸に百余人を集結しまさに血の雨を降らさんとした。この時清水からの加勢として派遣された中に、大政、小政等二十四人のなかに房五郎の名がみえる。また慶応元年荒神山闘争の後、次郎長は吉良の仁吉の復讐のため、三州寺津に四百余人の子分や仲間を集め、海路で伊勢に乗り込んだ。その人数の中にも房五郎は加わっている。

さて四ツ目屋についてだが、弘化年間の「江尻宿内軒並書上帳」には、四ツ目屋惣左衛門と記されており、本陣寺尾与右衛門の真向いにあって、二階建てで宿内では大きい旅籠屋だった。文化三年（1806）の「琉球人参府の役」の写本に「ご付添御用宿、本陣与右衛門、四ツ目屋惣左衛門」とある。



四ツ目屋跡地と想定される江尻宿寺尾本陣跡正面

山田房五郎の名は梅蔭寺の次郎長の墓地内で、小政の墓の前の玉垣に「江尻 山田房五郎」と刻印され残っている。伝承通り房五郎は小政の子分であったことを示している。

また、清水区西久保の秋葉神社正面の階段を昇ってすぐ左手に、明治十四年三月に建てた高さ五米程の大きな石灯籠がある。

これは清水港にはいる船の火ぶり灯台の役目を果たしたもので、この八角形の基盤に寄与した人たちの名が並んでいる。江尻本陣寺尾彦左衛門と並んで山田房五郎の名も刻まれている。

房五郎は、次郎長が死去して十年後の明治三十五年九月二十九日五十八歳で死去した。

墓は戦災までは玉垣に囲われてかなり立派なものであったようだ。しかし今はその痕跡をわずかに残すのみで、墓石には「俠客房五郎」と刻まれ、戒名は勇山道義居士、土台石には「山田」とあり、昔のままの姿で残っている。（以上）

和田島太左衛門と山田房五郎の墓前に手を合わせ、一行は法雲寺のある江尻をあとにした。そして次の古刹清見寺へ向う途中、車中にて『次郎長 庵原川の仲裁』のあらましを解説した。

天保 13 年、23 歳の次郎長は、北矢部の平吉宅での賭博のもつれで傷害事件を起こし、国を売って無宿・博徒となります。三河寺津の治助親分や武州の高萩万次郎親分のところに投じるなど各地を博奕で遊びながら転々としたある日、北矢部の傷害事件で殺したと思っていた佐平に偶然出会い、自分が凶状持ちでないことを知ります。これで喜んだ次郎長は再び清水に舞い戻って江尻の和田島一家に身をおき、暫く江尻一府中を遊び歩いていた。

そんなある日、甲州津向文吉一党が清水にやって来て庵原川に陣取り和田島一家と今から喧嘩が始まらんとしている知らせを聞く。次郎長は、太左衛門親分からこの一件を預かって単身庵原川へ向った。そこで仁義をきって津向の文吉親分に謁見すると、次郎長は双方の親分の言い分に誤解があることを理解した。

文吉は自分の子分の一人が他人の女房を奪って駿河に逃げた。この不徳に怒り、子分を始末すべく駿河の江尻の兄弟分の太左衛門を頼ってやって来たのだった。一方そんな事情を知らない太左衛門は、文吉が最近起こしたばかりの『甲州鰍沢での竹居一家との出入り（後で解説）』によって役人に目をつけられていることを心配し、大きな騒ぎになることを避けようとして文吉に配慮し、あえて会おうとしなかったのだった。文吉はなぜ会ってくれないのかわからなかった。そこに誤解があったのだ。実は日頃から太左衛門を良く思わず、陥れる機会をうかがっていた太左衛門の身内の三馬政が、この両者の誤解に乗り、文吉には「太左衛門が鰍沢の一件を役人に密告するつもりだ」とふれこみ一方、太左衛門には「津向一家が喧嘩支度をして攻め込もうとしている」と両者をあおっていたのだった。

次郎長はこの騒動が三馬政の計略である事を見抜いた。そして文吉をその場で説き伏せ両者の争いを未然に防いだのでした。

侠客の器量は喧嘩の強さばかりで決まるものではない、大きな喧嘩を仲裁できる能力が問われる。文吉は「お前はいい男だ。ひとつ立派に名を上げてくれよ」と次郎長の器量を認め、この事件の仲裁をきっかけに「次郎長の俠名は一気に高まった」のであります。



バスは丁度、次郎長の仲裁現場となった庵原川を通過。

文吉は、東海道の興津宿と江尻宿の互いに丁度外れにある庵原川を決闘の場を選んで陣を構えます。10数人の人数を大勢に見せかける為に河原に柵網を張って松明を間隔あけて灯して和田島一家を迎えうつ。そこへ度胸一番、次郎長が一人で飛び込んでいって文吉を説得しました。話を

つけると次郎長は、騒動を起こした犯人の三馬政に問い詰めるべく江尻に急ぎ戻るのですが、見破られた方の三馬政は逃げ出し、駿府の代官所に駆け込むと「和田島一家と津向一家が喧嘩をしている」と垂れ込んだ。このため次郎長は役人に追われる身となって逃亡。高萩の万次郎親分を再び頼って武州へ旅立つのでした。

さてもう一人の親分、津向の文吉の詳細は甲州に入ってからにすることとして、次は咸臨丸事件と関係の深い興津の清見寺へ向い、『咸臨丸殉難諸氏の碑』を見学した。案内解説は山田会長。

清見寺と咸臨丸殉難諸氏記念碑

清見寺は古代に清見ヶ関に付属する寺院として創建されたと伝えられている。中世には足利尊氏の保護を受け禅宗寺院として発展し、江戸時代までは臨済宗十刹の一つとして栄えてきた。この様に古く豊かな歴史を持つ清見寺には重要文化財や国指定名勝、県指定有形文化財が数多く所蔵されている。また江戸時代には朝鮮通信使の休泊所として国際的な文化交流の舞台となったことは有名である。平成六年には境内が朝鮮通信使遺跡として国の史跡に指定された。



興津清見寺正面門

この名利清見寺の山門を入って本堂正面右手に「咸臨丸殉難者記念碑」が建っている。

咸臨丸は明治元年、幕府榎本武揚率いる軍艦として品川沖を出航して北上したが、途中暴風雨に遭遇して大破し漂流しながらようやく駿河清水港に入港した。



しかし咸臨丸を追ってきた官軍（新政府軍）に攻撃を受け、無抵抗の乗員が殺害されその遺体を海に投げ捨てて、咸臨丸を曳航していった。官軍は遺体の収容を禁じたが、清水次郎長は禁を犯して七遺体を収容埋葬して供養した。山岡鉄舟はこれを知り壮士墓とした。

明治二十年咸臨丸関係者の発起により、咸臨丸殉難諸氏記念碑が、ここ興津清見寺境内に建立された。

その時の様子が『咸臨丸殉難諸氏記念碑落成報告書』で詳細に報告されている。

この報告書の冒頭に「咸臨丸乗員諸氏難に殉じ、当時土人山本長五郎の義気により、ここにその屍を葬ることを得た。ここにその顛末を記す」と書かれ、これを不朽に伝えらるゝとされ、次郎長を高く賞賛している。

明治二十四年四月十七日、清見寺前に「咸臨丸戦死者供養式執行」と大きく書かれた標札が建った。式典には招待された約百人の参列者だけでなく、地元興津町や江尻、清水町からも町民たち数千人が集まり、境内は立錐の余地ないほど賑わった。

報告によると、次郎長は十四番目に焼香している。（以上）

駿河の名刹清見寺をあとにして、一行は津向の文吉ゆかりの地へむかう。これより通る甲州みちは富士川に沿い、そこには江戸時代の清水の経済と非常に関わりあいのあった甲州との水運・富士川舟運に関わる場所・地域が点在していた。車中ではこの富士川舟運について解説が進んだ。

「 清水湊に繁栄をもたらした甲州『下げ米』と『上げ塩』 ―富士川舟運― 」

次郎長が生まれ幼少期を過ごした清水湊は、上方と江戸との物流を海上で結び、かつ富士川を水路として甲州・信州の内陸とも繋がる中継港でした。特に『甲州御廻米』といわれた甲州の年貢米の江戸への回漕は幕府の御用であり、それを可能にしていたのが富士川の舟運でした。清水の港橋のたもと『船宿末廣』とさつき通りを挟んで向えバス停裏に『甲州廻米置場跡』の石碑がその時代の名残をとどめています。



甲州から川下りした米荷は、岩淵で荷揚げされ馬の背で陸路を蒲原の吹上浜に輸送、そこから小廻し船で清水湊（向島）米置場に移し保管され、大廻船で江戸浅草の米蔵へと運ばれました。またその一部は今の清水小学校付近にあった駿府奉行の統括する幕府の御蔵にも納められ、次郎長の養子先の『甲田屋』もこの御蔵の払下げ米などの地の利で富を得ていました。甲州との繋がりには下げ荷の米のみでなく、「返り荷」として主に上方から清水に入津する瀬戸内の塩や地浜の塩を、今度は逆のルートで蒲原・岩淵を経由して内陸へ川上げすることで交易が成立。双方に大きな

な繁栄をもたらした。（図参照）

もともと甲信との交易は富士川沿いを中心に身延道等の往還が古来より存在していました。甲斐の武田氏も駿河からの塩や海産物をこの道に頼りましたが人や馬による少量で非常に時間や労力が掛りました。（今川の塩止め＝上杉謙信の「敵に塩を送る」）

徳川家康が天下を取り、江戸幕府を開くと年貢米の徴収・御用木材の供給などが必要となり、家康は「急流富士川に船を通わせ物質輸送の運河にせよ」と京都の豪商で土木事業家の角倉了以に命じます。そして慶長 12 年（1607）に着工、慶長 17 年ごろから通船が始まります。この結果、上流の釜無川や笛吹川が甲府盆地の南で集まる荷を甲州鰍沢から駿州岩淵までの 18 里（72 キロ）をわずか半日で下ることを可能としました。逆に岩淵からの川上げは塩や海産物の荷をのせた舟を船頭以下 4 名で曳いて河原をのぼり 3、4 日かけて鰍沢に到着しました。

通船の賑わいは江戸中期になると増大し、安永年間には、川船は 300 艘を数えたといわれます。甲州の河岸は年貢米の江戸への廻送という公用の運搬業務の一端を請け負っているとともに、運上金（営業税）を納めることで船を出して荷を運送する権利を得ていました。



蒲原 蒲原は東海道五十三次では 15 番目、吉原宿との間に富士川を控える宿場がありますが、そのほかに富士川水運と清水湊を繋ぐ物流拠点とする商人の町としても栄えました。清水湊から甲州へ持ち込まれる塩・海産物は、蒲原の塩問屋の小回し船で吹上浜まで輸送され、逆に岩淵経由の甲州御廻米も蒲原の船で清水湊へ輸送されました。蒲原と清水の間で小舟によるピストン輸送がされていたわけです。そして蒲原から岩淵へのルートは地図の東海道・陸路を馬の背に荷を載せて運ぶも

のでした。

何故この間が陸送だったのか？と言いますと、富士川の河口は線上に広がりしかも砂地の浅瀬であるため船の通行ができない。まして川船が海上に出て運搬する構造ではないという理由でした。

岩淵への道は、蒲原宿の東木戸を過ぎ一里塚の付近で北へ折れて曲り、急な坂をのぼって越えてゆきました。

「七寸以下の勾配でなければ荷を負う馬が通らず、三寸の勾配でなければ荷車が通わぬ」7 寸は約 35 度、三寸は約 17 度であるから、馬の背に荷をのせて越えてゆくのは非常に大変だったのではないのでしょうか？天保年間にこのルートに付け替えられたことからこの坂道を『新坂』と言いました。

岩淵 岩淵村は、慶長 7 年（1602）に富士川の渡船が始まった頃にはまだ町並は無かったが、公用で旅する武家たちの休息に難渋する有様をみて伊那備前守忠次が検地し、本来なら蒲原と吉原の間の宿でありながら宿場並みの整備が命じられます。富士川舟運もほぼ同時期に通船され、その発着点として河岸場と米蔵もこの岩淵に設けられました。下げ米・上げ塩の荷物の陸上運送は、先ほどもいいましたが岩淵村の特権で、蒲原までは馬の背により陸路を往復しました。富士川の増水時には渡し船も通船も「川止め」となるため、船頭の宿、また身延詣での旅人の宿など街道に立ち並び、飲食店や土産物屋、草鞋等の旅行用品を売る者、ひいては飯盛女も登場し繁盛を極めました。



富士川橋を渡らず直進してしばらくの川の土手に常夜灯が見えます。かつて富士川舟運・岩淵の船着き場・川岸がありました。現在、常夜灯の横には、富士川を開削した「角倉了以」の功績を讃える石碑が建っています。

ここからは富士川に暫く沿って遡上し、途中から52号線で甲州をめざします。

富士川舟運の難所

日本屈指の大急流の富士川を安全に通船させるために角倉了以は、岩を粉碎し、川底を削ったり埋めたり流路を変えるなど、親子2代に渡ってその工事を完成させます。それでも船乗りを脅かす幾つかの難所は存在し続けました。そのため富士川沿いには供養塔や安全祈願碑が多く、流域の所々に盆行事として川施餓鬼供養が今でも営まれ、水難の歴史を物語っています。

・木島地区の風習 『投げ松明』といって高い柱の上に取り付けた灯籠に松明を投げ入れる、運動会の玉入れのような行事ですが、「たいまつが籠に投げ込まれ籠が燃えることによって精霊が迷わないように道行を照らす明かりとなる」というのが云われ。毎年8月16日夕方開催。

・銚子ノ口（釜口峡） 三大急流と言われる富士川の中でも、舟運の難所の一つ銚子の口は静岡県の芝川町にある。川の中に流れ込んだ富士山の溶岩流を浸食し、流れが二分されて中之島を形成し、お銚子の口のごとく川幅が狭く大変流れが速くなっているため水が渦巻き、あたかも釜の湯が煮えたぎっているかのように見えたことから釜口峡の別称もある。

右画 歌川広重（雪中富士川之図）

・屏風岩 富士川中流域の支川である早川が合流し、激突した醍醐山の岩肌が屏風のように切り立っていることからこう呼ばれた。横からの流れで岩場に押される難所。早川は後に治水工事で下方へ流路が変更した。



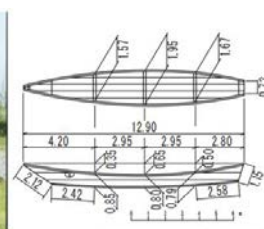
高瀬舟（笹舟）

通船に使われた船は高瀬舟といって長さ約 13m幅 1.8mの小舟。急流のうえ危険な岩場が多い富士川では頑丈なつくりではかえって破損しやすいため、あえて船底は一枚板で全体的に木材は薄くつくり、岩にぶつかっても浅瀬に乗り上げても板がたわむほど弾力性をもたせた。また富士川舟運は、別称「通船」とか、富士川を横断渡船する「横船」に対して「縦船」などとも称しました。

幕府は、この富士川舟運を免許制にし、乗組定数四人、旅客定員十五人、積載量は下り荷で米（54 kg）入りを 32 俵（1728 kg）、上り荷で塩（45 kg）入りを 24 俵（1080 kg）と定め、その監視取締りには鰍沢、十島、万沢に設けた「口留番所」が当たっていた。また、増水時の船留めもこの番所から布告され、事故をおこしたときは、天神ヶ滝（鰍沢町）までは鰍沢、それより下流は十島の口留番所に注進するように定められていた。明治時代になると警察所轄となるが、十島では必ず舟改めを行い定員については特に厳しかったといわれています。



鰍沢町が再現した高瀬舟（鰍沢民間スポーツ公園）



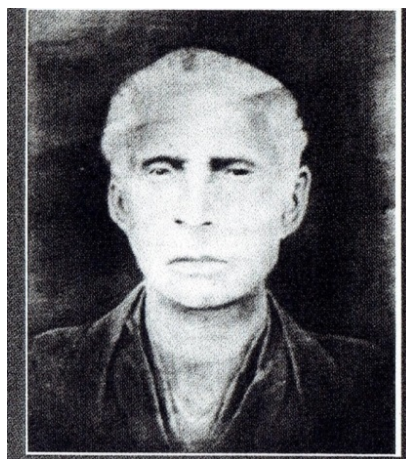
高瀬舟の基準図（明治15年までの標準型）

身延を過ぎたところで、津向の文吉親分の故郷、鴨狩津向村が近づきました。富士川舟運にまつわる話は帰路に再開します。

津向の文吉

津向の文吉は文化 7 年（1810 年）甲斐国鴨狩津向村（現・山梨県西八代郡市川三郷町）に代々名主を務める宮沢家に生まれました。（次郎長が文政 3 年（1820）生まれです）

右の肖像画は、のちに画家になった息子さんが書いたスケッチ画だそうですが、目が鋭く深い鼻筋の通ったなかなかのイケメンさんですね。



当時、天領（殿様不在の幕府直轄地）である甲州は博徒の天国で、それぞれの縄張りをあらいそい有力博徒の対立が激化していた。やがて文吉は近村の竹居安五郎（通称吃安）と対立し、弘化 2 年（1845 年）勝沼の博徒徒祐天仙之助と組んで、甲斐と駿河を結ぶ富士川船運の物流拠点である鰍沢で安五郎の食客で武士の桑原雷助を殺害した。これを「甲州鰍沢での竹居一家との出入り」と云う。そして同じ年に和田島太左衛門との間で出入り騒動を起こしたのです。

このように三十半ばで博徒として大変勢いのあった文吉ですが、嘉永 2 年（1849 年）の

博徒取締により、捕縛され八丈島へ流されます。その後、明治2年（1869年）の恩赦までなんと20年間を八丈島で暮らし、暴れもせず櫛を作って生計していたといひます。流人妻との間に男女二人の子供が生まれ、その一人はのちに「島小僧の喜代蔵」と呼ばれ次郎長の弟分として預けられました。

島で文吉は次郎長の活躍ぶりを風の便りで耳にしていた。文吉が本土に戻った知らせを聞くと次郎長は文吉を暖かく迎え入れました。のちの次郎長の子分衆の懷古談によれば「次郎長親分が、今日は大切な客人があるから、風呂を沸かしておけというので朝から掃除をして風呂をたてて待っていた。親分は門口で遠くを見てずっと待っていたが、そのうち子分らに守られて薄汚い爺さんがやって来た。親分はその爺さんの手を取って“親分お帰りなさい。長いことご苦労さんでした、と奥の部屋に通し、すぐにその爺さんを風呂に入れ



親分自ら背中を流した。親分が背を流すようじゃあ、よっぽど偉いお方だろうと思っていると、あとでそれが津向の文吉さんだとわかった」というエピソードが残っています。清水に数日逗留した後に生地である鴨狩津向村に戻った文吉は、新たに妻を迎え「帰国屋」という茶碗屋を開業したとか、島で習った民間治療の知識で医者まがいのことをし、木賃宿の「つむぎ屋」を営んだという。（木賃宿とは、昔し街道筋で、薪もしくは燃料代程度の安い宿賃で旅人を宿泊させた宿で、旅人が米を持参し、薪代を払って自分で米を炊くかまたは炊いてもらう、正規の旅籠の5分の一の低賃宿である）

また一方、刑期上りの大物親分ということで相談役として全国の親分衆のもとへ足を運んだ。荒神山の決闘の後に行われた、次郎長と穴太徳の浜松五社神社の手打ち式にも、文吉は藤枝長楽寺の清兵衛とともに仲裁役を務めている。また明治4年2月に亡くなった次郎長一の子分・大政の葬儀にも高萩の万次郎らとともに参列している。「庵原川の仲裁」で出会った両者の交友は、文吉本人が亡くなるまで続いたのでした。

文吉は本名を宮沢文吉といい、明治16年（1883年）10月5日73歳で死去。墓は文吉の生家のすぐ近く。大正10年（1921年）9月建立。戒名は「普願院英山文雄居士」。

なお長年の抗争相手であった甲州竹居村の安五郎（ども安）もまた、文吉同様に賭博の罪でこちらは新島へ流刑された。安五郎は、ペリーの黒船来航で動揺・混乱する幕府の目をついて新島からの島抜けを成功させて甲州に舞い戻り、再び勢力を復活させようとしたが、幕府の威信にかけた捜査の網にかかり獄中死しています。（敵対勢力の祐天仙之助と国分三蔵の罠にはまったという説あり）

多くの甲州博徒が抗争の挙句に命をおとしていった中、津向の文吉は、幕末の混乱期を



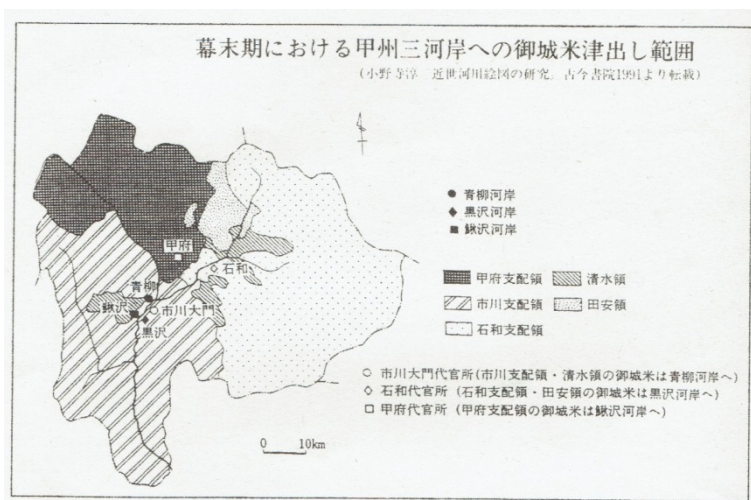
幸運にも島で過ごし、のちに子宝にも恵まれ晩年も近隣で親しまれる好々爺として過ごしました。大変幸せな仁侠人であったといえるでしょう。

御子孫の温かい歓迎と案内を受け、津向の文吉親分の墓参を無事終了し、一行は富士川舟運の甲州測の発着点、鰍沢に向いました。

ここからまた富士川舟運のお話に戻ります。

鰍沢を中心とした甲州の集積点「三河岸」

舟運が開通して江戸時代中期までは、鰍沢が「下げ米・上げ塩」のほとんどの荷の集積地でありましたが、明和 2 年（1765）以降、甲府盆地は甲府・石和・市川の三つの代官所の三分支配となると、三か所の河岸からそれぞれの領地の年貢米が川下げされました。



黒い範囲が甲府領で年貢米は鰍沢河岸へ

縞々の範囲が市川領で年貢米は青柳河岸へ

点々の範囲が石和領で年貢米は黒沢河岸へ

※ 清水湊からの「上げ塩」は、鰍沢で荷を桔梗俵に詰め替え甲州一帯、遠くは信州塩尻まではこばれました。

このため信州では塩そのものを『かじかざわ』と呼んで珍重されました。



角倉了以の功績をたたえる碑文が刻まれた「富士水碑」が建つ付近の国道 52 号の新道を補修する際に、平成 17 年に実施した鰍沢河岸の発掘調査で、荷揚げ場や番所などの位置や埋蔵物が出てきたのですが、様々な出土品に混じってサイコロと賽が出たそうです。しかもサイコロは、数目に穴があげられ、一部に鉛が残存していることから、八百長賭博用に調整されたものである可能性があるという報告でした。

御廻米の川下げのシーズンは、米の収穫後の11月から翌年の3月くらいにかけてで、それ以外は幕府の御用・公務から外れるので、番所でも博奕が行われたのかもしれませんが。博徒が活躍した痕跡がしっかり残されていたという事です。

舟運に携わる船頭・荷役の生活

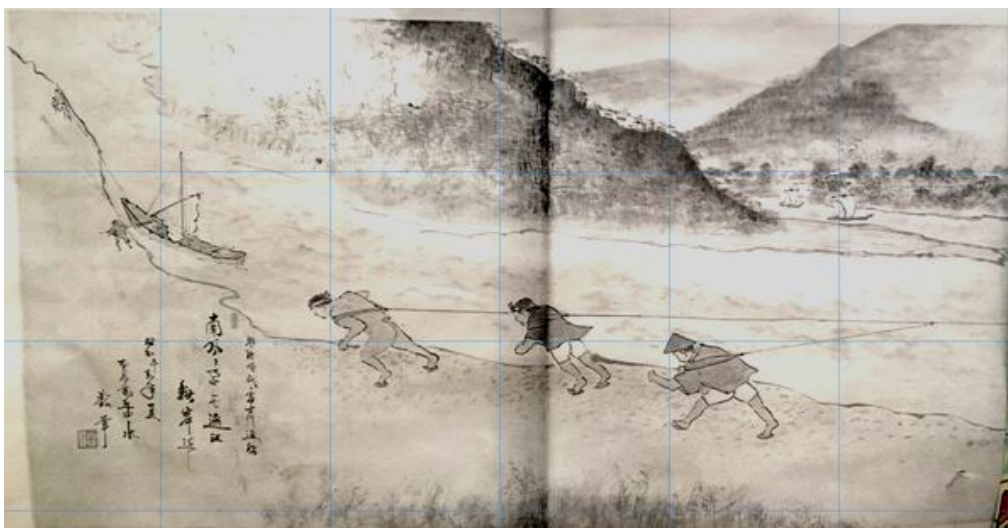


富士川舟運は地域経済の根幹を担うものであり高収入を得たので、これに携わる人々は当時としては花形の職業でした。特に船を操る船頭は憧れの的で、村では肩で風切って歩けた。しかしそれは「板子一枚下は地獄」の危険と隣り合わせでもある過酷なものでした。

舟の乗組員は通常4人が乗り込み、責任者の船頭一人・半乗りと称する補佐役の船頭一人・小船頭とカマス背負と言われた荷役（荷の積み下ろし）、作業専門の者の4人。甲州三河岸から岩渕河岸に下る舟は、船頭の舟を操る技術に全てがゆだねられ、乗船客の命や積み荷の運命は船頭の竿一本に託されていました。激流に竿を突き、水しぶきを上げて下る舟の姿は格好のいいもので、川沿いの娘らの心をくすぐったといひます。

しかし、上り舟は大変であった。一トン近い荷を載せた舟に綱を付け4人で渾身の力で急流を4日間かけて引き上げたのです。綱を肩と首の付け根に括り付けているので、いざとなれば舟もろとも命がけで体力のいる仕事で、足の爪先に力を込めるので草鞋も一日と持たなかったといひます。下り舟の格好良さと、上り舟の苦労の様子を富士川船頭唄は、こう歌いました。

「上り舟見りや愛想が尽きる、下り舟見てまた惚れる」



身延町歴史民俗資料館に展示の「上り船を曳き上げる図」を撮影

彼らは重労働のためか酒を浴びるほど呑み、博打を覚え、沼久保で泊れば大宮（富士宮）へ、岩淵に着くや蒲原の女郎買いにと足を延ばす。懐具合さえ許すなら船頭としてこんな楽しみは無かったといえます。「飲む、打つ、買う」の3つは当時の男の甲斐性・象徴的な行為でありました。この舟運によってこの地方がいかに潤っていたかを知るエピソードですね。

富士川舟運の終焉

幕府御用の年貢米の輸送は、明治維新で幕府倒壊とともに消滅しましたが、逆に幕府の時の厳しい規制が解かれて通船の許可が容易に得られるようになると、舟は旧来の300余艘から一挙に800艘に膨れあがりました。これは川下り荷の米の輸送の御用が終わり舟運の必要性が無くなったのではなくて、塩の取引が自由化となったことで、需要の多い甲州側がかえって賑わい、川上り荷の舟が増えたためであります。

「上げ塩」の輸送量は、江戸時代の年間10万俵余りだったのが明治になると40万俵ほどとなり、舟数も最盛期の明治30年代には千五百艘となっています。とすれば概算で一艘に四人の乗り手として就労人員は6000人、この一大産業は流域に大きな経済の波及効果をもたらし、特に岩淵では船宿70軒、一カ月の宿泊客は15,000人余と繁栄を極めました。

こうして絶頂期を迎えた富士川舟運でしたが、明治35年に中央線八王子～甲府の鉄道が開通すると、輸送量を遥かに超える物資が迅速に運べるようになり、大きな打撃を受け舟運は激減してしまいます。そして東海道線富士駅から中央線甲府駅につながる身延線が昭和3年に全線開通すると、約300年の使命を終えてついに富士川舟運は姿を消したのです。

往古に人や馬によって4日間かけて運ばれていた少量の物流も、現在は、間もなく開通する中部横断道によって大量の荷物がわずか1時間で運ばれるようになろうとしています。

結び

富士川舟運は清水湊と甲信を結ぶ大動脈として人と物の流れを作り、周辺地域に大きな繁栄をもたらしました。特に発着駅であった鰍沢・岩淵のように富と労働力が集中するところには娯楽や風俗が生まれました。

幕府の治安・警察能力が低下した幕末は特に、博打の開帳や興業娯楽や風俗は横行しそれに伴う金銭トラブルは必然的に起きました。それを仲介する博徒が地域に根をはり利権と勢力を保持しようとしていました。

鰍沢一帯は津向の文吉が竹居安五郎と縄張りを争い、一方岩淵はおそらく和田島の太左衛門の息が掛っていたと思われます。

その竹居安五郎の後を勢力下にした黒駒の勝蔵と、太左衛門・文吉の後をテリトリーとした次郎長が幕末に火花を散らしたのです。

そして迎えた維新での行動が両者の運命を分けます。次郎長は伏谷如水によって街道警

固役に取り立てられ日の目をみます。一方黒駒勝蔵は勤皇派について活動し戊辰戦争にも新政府軍の一員として参戦したが、後にその新政府によって獄殺されてしまいました。次郎長はその後、山岡鉄舟と出会い更生の道に入っていきます。しかし勝蔵亡き後も黒駒残党との遺恨はまだ根強く燻り続けていました。このため両者は浜松の五社神社で手打ち式をして決着をつけることとなります。

この時、藤枝の長楽寺清兵衛とともに仲裁役に就いたのが、かつて庵原川で次郎長が喧嘩仲裁をした津向の文吉なのであります。

きびしい博徒の世界を生き抜いた次郎長が、いかに義をもって同盟者や子分といった人物網を構築して来たかが、こうした巡りあわせの中にもうかがえます。



さて清水には富士川舟運によってもたらされた湊の繁栄を後世に伝える『甲州廻米置場跡』があると前述しましたが、この石碑が建っている一帯は実は山梨県の県有地であるという事が最近テレビでも話題となりました。甲州の番所がここにあったからか、いまだに「山梨県の」という理由の真意は分かりません。もしそれが富士川舟運を通して、江戸期からの甲州と清水湊との

繋がりをここに大事に留めているならば、それも感慨深いものがあります。

またその土地には『船宿末廣』が建物の半分入っています。次郎長さんが甲州との縁を片足で踏ん張って繋とめているかのように思えてなんだか微笑ましいですね。

話が清水に戻ってきたところで旅の報告の筆を置くことにします。また次の次郎長史跡探訪の旅にご期待ください。